琉球大学学術リポジトリ

原発性アルドステロン症患者に対する副腎静脈血サンプリング検査による片側診断における最適な評価項目の検討

メタデータ	言語: English 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Azama, Kimei, 安座間, 喜明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40866

平成30年3月8日

（別紙様式第７号）

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 ＊　第　号 論文博	氏名	安座間 喜明
論文審査委員	審査日	平成 30 年 3 月 7 日	
	主査教授	大屋 祐輔	
	副査教授	高山 千利	
	副査教授	齋藤 誠一	

（論文題目）

Adrenal venous sampling in patients with primary aldosteronism; which is the best evaluation method for laterality assessments?

（原発性アルドステロン症患者に対する副腎静脈血サンプリング検査による片側診断における最適な評価項目の検討）

（論文審査結果の要旨）

副腎静脈血サンプリング検査(Adrenal venous sampling:以下 AVS)は両側副腎静脈にカテーテルを挿入して血液を採取し副腎静脈血中ホルモンを測定することで、原発性アルドステロン症におけるアルドステロン過剰分泌側を決定する検査である。過剰分泌が片側性か両側性かの評価は治療方針に大きく影響し、片側性であれば外科手術によって症状の改善が期待出来る。両側性であれば内服治療の適応となる。

多くの症例では、左副腎静脈は下横隔静脈と合流し、共通幹を形成して左腎静脈に流入する。左副腎静脈血を採取する際、カテーテルを左副腎静脈本幹まで挿入し採血している報告と、共通幹に留置して採血している報告が混在し、至適な採血部位について一定のコンセンサスが得られていない。また、AVS では過剰分泌側診断のための評価項目が複数あり、どの項目が最も有用かという点に関して一定の見解が存在しない。さらに当院では検査途中に ACTH 負荷を行い負荷前後の値を参考にしているが、ACTH 負荷の必要性に関しても施設間で見解が分かれているのが現状である。

AVS におけるこのような問題点について詳細に検討を行った報告は非常に少ないことから、本研究では、AVS で得られた採血結果を解析し、最適な評価項目、左副腎静脈採血における至適な採血部位、ACTH 負荷の必要性を検討することを目的とした。

方法としては、ACTH 負荷前後で左副腎静脈本幹および共通幹、右副腎静脈、下大静脈から採血を行い、得られた検体について、局在診断の評価項目(PAC: plasma aldosterone concentration, LR: lateralized ratio, CR: contralateral ratio)を算出し、各々の正確性を ROC を用いて比較するとともにその感度、特異度、カットオフ値および Az 値を求め、どの項目が信頼性が高いかを検討した。

検討の結果、ACTH 負荷後に採取された左副腎静脈本幹の検体を用いた LR 値（LR-CAV-post-ACTH）が最も診断能が高かった（93.3%, 感度 0.93, 特異度 0.84）。また ROC 曲線を用いた評価では、ACTH 負荷後の CR 値(CR-post-ACTH)が最も高い Az 値（0.89）を呈した。

原発性アルドステロン症患者に対して AVS により過剰分泌側を決定する際に、LR-CAV-post-ACTH、CR-post-ACTH といった信頼性の高い評価項目を重視して検討することで、より適切に過剰分泌側診断を行うことができるものと思われる。またこれらの評価項目が高い信頼性を示したことから、より正確な評価のためには左副腎静脈本幹からの採血や ACTH 負荷後の採血が必要と考える。

本研究を通して得られた新たな知見が、AVS のさらなる普及や適切な治療に寄与しうるものと思われ、博士課程の学位論文に値すると考えられる。

備考　1　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書きとすること。
　　2　要旨は800字～1200字以内にまとめること。
　　3　＊印は記入しないこと。